

学生のふりかえりを促すためのリフレクションペーパーの役割

當山 明華

長崎大学大学教育イノベーションセンター

Sayaka TOYAMA

Center for Educational Innovation, Nagasaki University

Key Words : Reflection, Active Thinking, Logical Thinking

1. はじめに

予測が困難な社会となりつつある中、2016年高大接続システム改革会議は、「大学教育の使命として、社会の大きくかつ急激な変化に向き合い、生涯を通じて不断に学び、考え、予想外の事態を乗り越えながら、自らの人生を切り開き、社会づくりに貢献できる人間を育成することにある」としており、大学は社会の変化に対応できる人材を育成するために、学生に対して能動的に学修し生涯学び続ける力を修得させることが喫緊の課題であり、アクティブラーニング等による教育改革が進められている。そのため各大学では、受動的な学修から学修者を中心とした能動的な学修へとパラダイムの転換を図っている。能動的な学修とは、「書く・話す・発表するなどの活動への関与と、そこで生じる認知プロセスの外化を伴う（溝上、2014）」ものであり、それは新たに得た知識と自分の中にある知識や考え、気づきをつなぎ合わせて可視化することだと考えられる。

認知プロセスの外化のためのツールとして、大福帳やミニッツペーパー、リアクションペーパー、リフレクションペーパーなどと呼ばれるものがある。いずれも、学修者が授業の要点や理解度、質問などを記入するものであり、学修者の外化の手助けとなっている。これらについて本稿では、リフレクションペーパーと称する。

本学の教養科目である全学モジュール科目「コミュニケーション基礎実践」では、授業終了後にリフレクションペーパーを配布し、要点や感想、質問を記入させ、認知プロセスの外化を図ろうと

している。その記述内容を見てみると、漠然とした内容を書く学生もいれば（たとえば図1、図3、図5）、自分の考えを具体的に記述する学生もいる（たとえば図2、図4、図6）。前者は授業の内容だけを捉えた主観的意識の表出のみにとどまっているが、後者は授業で得られた知識と自分自身の状況をつなぎ合わせて、ふりかえった理解・分析ができていられると思われる。本科目のリフレクションペーパーは、学生が授業の何を要点だと捉え、また何を考え感じたのかといった、主観的意識の表出のためのツールとして利用できるだろう。しかしながら、得た知識を活用するような能動的な学修のためのツールには至っていないと考えられる。

能動的な学修は、新たな知識と自分の中にある知識や考えをどのようにつなぎ合わせて可視化するか、つまり知識をどのように活用し可視化するかが重視される。そのため、本科目のリフレクションペーパーを、知識の活用方法を考えるための手助けとなるようなツールとする必要がある。本科目は、大学や社会でのコミュニケーションに必要とされる基礎能力の育成をめざし、ロジカルライティングを中心に、プレゼンテーションやディスカッション等の基礎的技能の修得を実践的に行う授業である。活動形態として主にグループワークを行っているため、授業到達目標の一つに「他者の意見を聞いたうえで、自分の意見をまとめ、述べられる」をあげている。リフレクションペーパーにおいても、他者のリフレクションペーパー、特に新たに得た知識を活用できていると思われる

他者のものを見ることによって、自分自身の知識の活用方法を考えるための手助けになるのではないかと考えた。さらに、リフレクションペーパーは認知プロセスの外化のためのツールであるが、前述したように主観的意識の表出に留まるものもある。これらの学生は、リフレクションペーパーのこのような機能に気づいていないのだろうか。

そこで、本稿では、他者のリフレクションペーパーを見ることによって、授業で新たに得た知識の活用方法を考えることができるのか、そして授業内での活動だけが能動的な学修でなく、リフレクションペーパー自体がそのツールであるというリフレクションペーパーの機能についての気づきを得るのかという点に焦点をあてて報告する。

2. 実施概要

2.1 対象者

2017（平成29）年度第3クォーターで一年生を中心に開講されている教養科目「コミュニケーション基礎実践」を受講している学部生 82名のうち、リフレクションペーパーにおいて、他者のリフレクションペーパーについての内容を記述した学生は23名いた。そのうち、特にリフレクションペーパーから得られた知識と自分自身の状況をつなぎ合わせて、ふりかえった理解・分析ができていると思われる8名を対象者とし、その記述状況を報告した。

2.2 実施状況

本科目はクォーター制のため、一週間のうち連続した2回の授業を行った。活動形態は、授業の前半で知識理解のための講義を行い、その後、個人ワークそしてグループワークを行うものであった。

本科目は、大学や社会で求められるコミュニケーションの能力を全体的に高めることを目指している。そのため、ロジカルライティング、プレゼンテーション、ディスカッション等の基礎的な技能を高め、さらに問題の要点を理解・判断したうえで、自分が考えた意見を人に伝えたり、自分と異なる意見を持った相手とも関係を構築することを目標としている。本科目の授業スケジュールを表1に示す。

本科目はオムニバス形式であり、筆者の担当した授業回の主な到達目標は、「自分の意見をまとめ、相手に分かりやすく伝えること」、「自分自身で学修の習得状況を確認・分析・評価するための基礎的な技能を知り、活用できるように努めること」であった。筆者が担当した授業回（1, 7, 8, 11, 12, 13, 14, 15）については、表1に概況およびキーワードを記載し、さらに担当回を太字で示した。

2.3 手続き

リフレクションペーパーは、A5サイズの手紙を使用した。そこに「本日の授業の要点および感想

表1 授業スケジュール

回	テーマ	概要およびキーワード
1	オリエンテーション	趣旨説明
2	ライティングの基礎を学ぶ	
3	論理的な表現とは	
4	レポートの書き方を学ぶ	
5	コミュニケーションスキルについて学ぶ	
6	ディスカッション・プレゼンテーションの基本	
7	論理的とは（1）	社会の求める人材像、情報の解釈
8	論理的とは（2）	根拠を伝える
9	情報セキュリティについて	
10	ソーシャルネットワークについて	
11	思考力について学ぶ（1）	動機づけ
12	思考力について学ぶ（2）	学習方略、メタ認知
13	思考力について学ぶ（3）	他者のリフレクションペーパー、 演繹法、帰納法
14	思考力について学ぶ（4）	推論
15	まとめと振り返り	他者のリフレクションペーパー、 これからの社会はどうなるか

を書いて下さい。質問があればそれも書いて下さい。」と記載し、自由記述での回答を求めた。毎回の授業終了時刻の 10 分前に配布し、学生が記述後に回収した。リフレクションペーパーは出席確認を兼ねているため、学生番号および氏名の記入を求めた。リフレクションペーパーに記述した内容および質問は個人が特定されるものではなく、個人の評価とは一切関係がない旨を最初の配布時に口頭で説明した。

本稿は、他者のリフレクションペーパーを見ることによって、授業で新たに得た知識の活用方法を考えることができるのか、そして授業内での活動だけでなく、リフレクションペーパー自体が能動的な学修のためのツールであるというリフレクションペーパーの機能についての気づきを得るのかという点に焦点をあてているため、表 1 に示すように、他者のリフレクションペーパーを授業に取り入れた第 13 回および第 15 回の授業時のリフレクションペーパーについての報告を行う。

3. リフレクションペーパーにみる気づき

3.1.1 第 13 回授業について

第 13 回の授業の最初に、第 7 回からの続きとして、社会が求める人材になるためには主体性や能動的な思考が重要になってくることを話し、その後、能動的な思考の例として第 7 回の授業時に学生が記述したリフレクションペーパーを提示した(図 1 および図 2)。図 1 は主観的意識の表出に留まっていると思われ、「外部の情報を受け取ったままで、具体的に自分の中で解釈できていないように見えます」と説明した。図 2 は新たな知識と自分の知識をつなぎ合わせるができていると思われ、「自分の思考の状態を確認して、それを相手に伝わりやすく説明できています」と説明した。そして、「これらのリフレクションペーパーをふまえて、今日の授業を受けてみてください。リフレクションペーパーに何を書くか考えることは、能動的な思考や気づきのトレーニングになると思います」と伝えた。

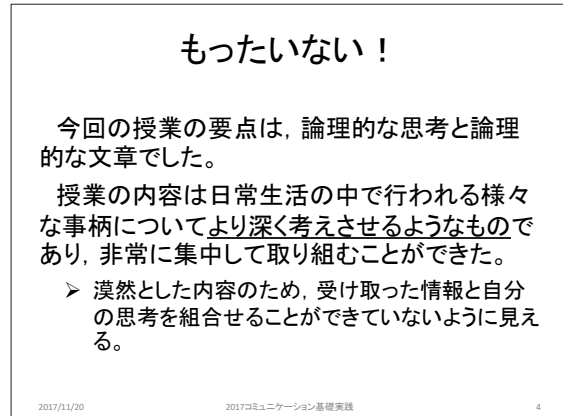


図 1 第 13 回授業 (1)

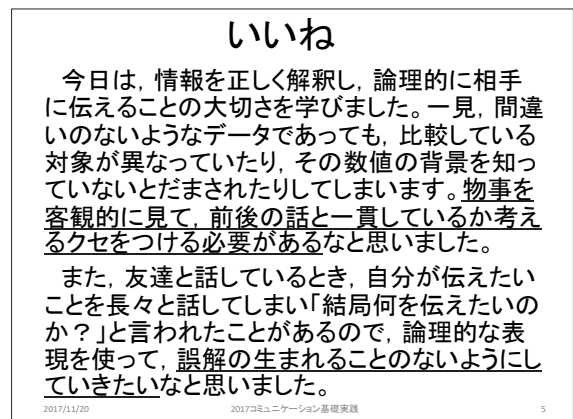


図 2 第 13 回授業 (2)

3.1.2 第 13 回授業後のリフレクションペーパー

第 13 回の授業の出席者は 71 名であり、そのうち他者のリフレクションペーパーについての記述を行っているものは 10 名であった。特に具体的な内容を記述した 4 名を以下に示す。

学生 A 「授業最初のリフレクションペーパーに関して、自分は感想を書いたりすることが得意ではないから、先生をうなずかせるようなことを書ける人はすごいと思う。まだまだ、自分が授業を受動的に受けている証拠だし、その人は先生の話を聞きながら、違うことを考えることができる人なのだと尊敬する。」

学生 B 「今回の講義のはじめに紹介された他の人のリフレクションペーパーを見て、思ったことがありました。聞くだけならば、とても簡単に私にも書けそうな気がしました。しかし、今実

際を書いてみると、やはり私の文章は具体性に欠けると感じます。私が授業内で感じたことを感じたままに終わっているのが原因ではないかと考えます。今、メモをとる習慣はついていますが、感じたことまで書く習慣はついていません。これからメモをする際には、自分の思ったこと考えたことも書いていきたいです。」

学生 C「最初に示されたリフレクションペーパーの内容について、私も相手に伝わるような文章が書けていないと思いました。授業を真剣に聞いていてもただ聞いて、メモするだけで、能動的に学習する頭に切り替わっていなかったと思いました。しかし、どのように能動的に学習すればいいかまだ分かりません。私はこの前、知識が足りないと思い、教育に関する本を買い、一日2、3ページですが読み続けています。」

学生 D「今日は主体性について考えた。私はこの授業でリフレクションペーパーについての意味についてよく理解することができたと思う。授業を受けることで学んだこと、そしてそれをどう思ったか、今後どうしていきたいかまで考え、それを文章化する、つまり、リフレクションペーパーに記入する。それこそが主体性をつくることになり、つまりは社会の求めている人材に近づくことになると思った。」

3.2.1 第15回授業について

第15回の授業は、最初になぜこの科目では、論理的思考や能動的思考などを何度も繰り返して話したかについて、これからの社会の変化と合わせて説明した。そして、第14回授業のリフレクションペーパーを提示した(図3～図6)。図3と図5は、具体的な記述がないため、「何が違って、どの部分が大事なのか」「何について気をつけたいのか相手に伝わらないです」と説明し、図4と図6については、「図3、図5とどこが違うと思いますか。具体的に書いています。そして、自分自身を客観的に見ようとしています」と説明した。提示の仕方は図3から数字の順で示した。そして、第13回の授業と同様に、「これらのリフレクシ

ョンペーパーをふまえて、今日の授業を受けてみてください。リフレクションペーパーに何を書くか考えることは、能動的な思考や気づきのトレーニングになると思います」と伝えた。

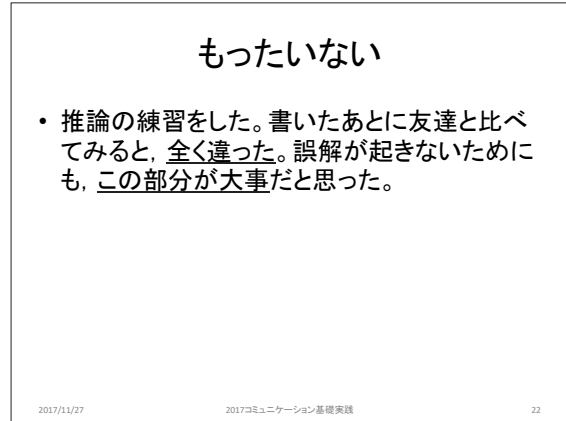


図3 第15回授業(1)

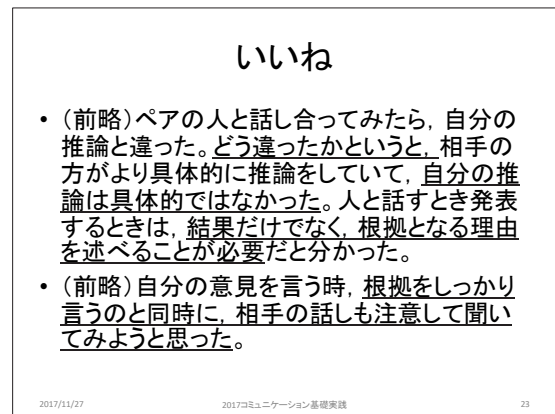


図4 第15回授業(2)

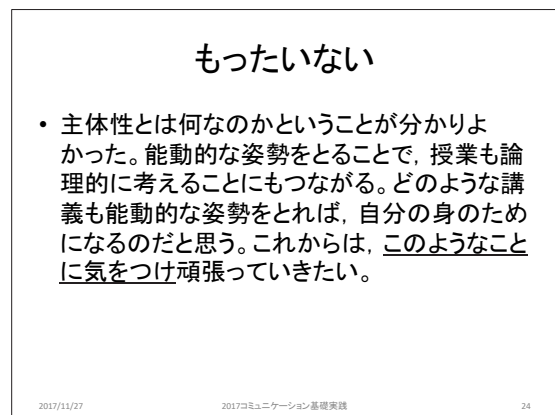


図5 第15回授業(3)

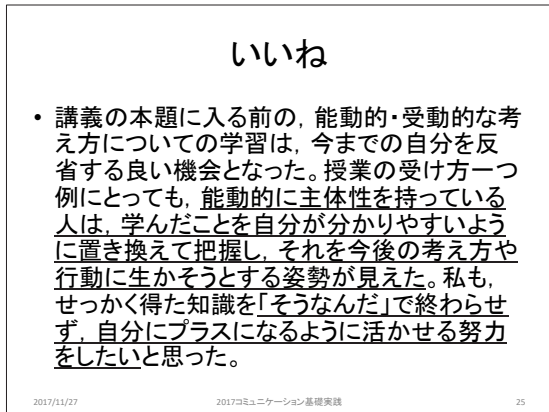


図6 第15回授業(4)

3.2.2 第15回授業後のリフレクションペーパー

第15回の授業の出席者は72名であり、そのうち他者のリフレクションペーパーについて記述を行っているものは13名であった。特に具体的な内容を記述した4名を以下に示す。

学生E「リフレクションペーパーは、論理的に考えられるようになるために重要だということを自分で気付いている学生がいたことに驚きました。私は気が付かなかったので、自分の思考と先生の話が繋がれることがすごいなと思いました。リフレクションペーパーを書くことで、話の内容を復習でき、自分で要約できるから、論理的思考が養われると思うので、これから意識して授業のまとめをしてきたいと思いました。」

学生F「今回の授業を受けて、このリフレクションペーパーを書くことの大事さに気づいた。私は毎回リフレクションペーパーを適当に済ませていたところがあり、何の意味があるかということを考えもしなかったの、よく現代の若者に欠如していると言われている相手が何を求めているのかということ自分を想像することを怠っていて、その点は深く反省すべきだと思った。また、リフレクションペーパーを書く上では論理的思考が大事だと今日学んだので、まずは面倒くさがらずに真面目に取り組むことから始めようと思う。」

学生G「今まで14回この授業を受けてきて、『具体的に話すことができる』『インプットしたことをアウトプットできる』など論理的に話すためのことや、メタ認知や客観視することといった論理的に考えることを学んだ。けれど、今日の他の人のリフレクションペーパーや授業についてふと考えたときに、この話し方や考え方もただインプットしただけで、本当に自分の中に取り入れられていないことに気づいた。タメになると思ったことをメモして、『自分は能動的に学んでいる』と錯覚を起こしていたことをこの最後の授業で気づいたことがとても悔しい。次のクォーターでは、ちゃんと“能動的”に学びたいと思うが、まずはメモを見直しながら学んだことを自分のものにしたい。」

学生H「今日の講義で学んだことは、リフレクションペーパーの大切さです。小学校の頃から今まで十数年学んできて、授業の終わりに抱く感想のプリントや、リフレクションペーパーの意味が分かっておらず、言われるがまま書いて提出して、終わっていました。でも今日、リフレクションペーパーは思考の積み重ねで、考えたことを文章化し、客観視することで初めて自分の思考が完成する、次につなげることが出来るのだと分かり納得しました。今後の別の講義で提出するであろうレポートやリフレクションペーパーも『論理的に』『推論を』『具体的に』ということ意識して取り組みたいと思います。」

4. まとめ

今回、他者のリフレクションペーパーを見ることによって、新たに得た知識の活用方法を考えることができるのか、そして授業内での活動だけでなく、リフレクションペーパー自体が能動的な学修のためのツールであるというリフレクションペーパーの機能についての気づきを得るのかという点に焦点をあてた。その結果、新たな知識と自身の状況をつなぎ合わせて可視化することができたことが確認できた。例えば、学生A、学生B、学生C、学生E、学生Gは、具体的ではなく何となく感じたまま記述するだけでは、能動的な学修

にはならないということに気づき、学生 D、学生 H は、得た知識と自分自身の状態を分析し、次の理解や活用へつながる記述があった。さらに、学生 D と学生 F は、能動的な学修は、授業内での活動だけでなくリフレクションペーパーを書くことでも行われるといった記述があった。

しかしながら、本稿はリフレクションペーパーについての記述を行った学生を言及するだけにとどまっている。リフレクションペーパーの記述はないものの、得られた知識と自分自身の状況をつなぎ合わせて可視化していると思われる、つまり認知プロセスの外化を行っていると思われる記述も確認できたため、他者のリフレクションペーパーを見る前と後の記述内容についての詳細な分析が必要である。さらに、このような認知プロセスの外化はすべての学生に生じたものではないため、どのような様相の学生に効果があったのかといった分析も必要である。

さらに、学生 E、学生 F、学生 G、学生 H は、リフレクションペーパーの機能についての気づきの記述があったが、今回の授業ではじめてその機能について理解したようであった。このことにより、学生はただ何となく書いているだけなのだろうか、という疑問が残った。学生がリフレクションペーパーをどうとらえているのか、リフレクションペーパーの考え方を理解しているのかについても今後調査を行いたい。

引用文献：

- 溝上慎一(2014). アクティブラーニングと教授学習パラダイムの転換 東信堂.
- 高大接続システム改革会議「最終報告」(2016). www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/.../1369232_01_2.pdf(最終閲覧:2019年1月22日)